

ベッド・メイキング (短編脚本)

作 鈴木 宏志

約一時間

一稿 (二〇一四年十月二十六日～十一月十二日)
二稿 (二〇一六年一月)

キャスト 四人

花田由佳
奥寺知子
九条直人
相原明美

● 1場 初冬、夜十二時過ぎ、住宅地の一角

救急車のサイレンが近づく。赤い回転灯が大きくなり、唐突にサイレンが止む。家々の明かりがバラバラに点灯。野次馬の囲いができる。

由佳「誰が呼んだの？ ねえ、知らないですか？ ねえ、わかりませんか？ あの音を呼んだのが誰だかわかりませんか？」

直人「あれ？ あれれ、お宅は花田医院のイカレポンチ」

由佳「な、なんですか。そんなに見ないでください、人の顔」

直人「へええ。(訳知り顔) あんたじゃなかったのか？」

由佳「あ、あたしじゃないです！ 何で、あ、あたしが呼ぶんですか」

直人「あんた前に何度救急車呼んだか、自分でわかってないようだな。俺は知ってるんだぜ、あんたの秘密を。由佳の頭がイカレポンチだったことを」

由佳「そんなこと言って、人のせいにして、本当はあなたじゃないんですか？ 呼んだの」

直人「俺が？ 冗談じゃない。救急車のサイレンの音の違いを聞き分けられるってだけだ。

俺がわざわざ呼ばなくなったって、花田医院の由佳みたいに呼んでくれる人がいるからとくに不自由してないんだよ」

知子「悪趣味の人間がいるもんだね、世の中には。よりによって、サイレンの音が好きだなんて。真っ赤に燃える炎見たさに消防士になると同類かい？」

直人「そんな犯罪者紛いの気違いと一緒にしないでくださいよ」

知子「だったら何さ」

直人「救急車のサイレンの音ってのは、ホントに二種類あるんだ。だけど、どうもおかしなことに聞き分けられる奴がひとりもない。俺だけが違いを聞き分けられるんだ」

知子「それで？」

直人「それでって、それだけさ。何だよその目は」

知子「マニアックな野郎を見る目。うふふ」

直人「！ そういえばお宅も、救急車のサイレンの音に誘われて飛び出してくる女だった。普段滅多に見かけない顔だ。花田医院の由佳ほどじゃないが、こんな夜にしかお目

にかかれない女」

由佳「こんな夜にしかお目にかかれない、って何なんですか？」

知子「あら、あんた、お久しぶりね。こないだのサイレンの夜にも、慌てて飛び出してきた子だ。ごきげんよう」

由佳「こんな夜、こんな夜って、どんな繋がりを持ってっっていうんですか、あたしたち」

よくよく顔を窺う由佳。スカーフを巻いたり、以前のポーズを決める知子。

そして、気付く由佳。恥じらいから会釈して離れる。

由佳「サイレンの音が二種類あるって、どういうことなんですか」

直人「その前に、こつちも聞いておきたいことがある。さっき、この辺りまで近づいてきた音は覚えてるだろうか」

自信がなく顔を見合わせる由佳と知子。

直人「なんだよ、そんなことじゃあまるで話にならない。覚えてなかったら比べようもないだろ」

由佳「覚えてます。あたし、しかと覚えてます」

知子「大丈夫なの？ そんなキツパリ言い切って」

由佳「いいから話を合わせてください。お願いですから」

知子「握られた弱みを突かれないように」

由佳「何いつてるんですか。違います、そんなんじやありません」

直人「耳を澄ませば、ほら、また鳴りだした」

由佳「耳を澄ませば、聞こえるのね？」

満足顔の直人。違いのわからない由佳と知子。

知子「あ、わかった。一抜けたー」

直人「兄さん、にー抜けたー」

由佳「待って、待ってよー。聞こえる、聞こえるんだけど、どこがどう違うかなんてわからないじゃない。嘘つき、あなたたち揃って嘘つき」

知子「拗ねてるよ、この子。かわいいー」

直人「久しぶりにシャバに出た気分ではしゃいでるんです」

由佳「あたしはずっと、生まれてこの方シャバ以外で暮らしたことなんてありません」

知子「あたしはずっと、まともな世界、シャバで生きてきました」

先程からずっと隅で聞いてた明美が顔を出す。

明美「あたしも、このシャバで友達が欲しい」

皆が一斉に明美を注視。

直人「あたしも、このシャバで友達が欲しい、と来ましたか」

知子「リアルな悩み。近ごろこういう女が多いのね」

由佳「ここはシャバでしょ。救急車のサイレンが走るんだから」

知子「呼んでも救急車が来ない町は地獄の一丁目。花も人も咲くもんですか」

直人「おい、由佳の家の前で止まったぞ」

由佳「だから、うちは呼んでないって」

直人「お前の家の人じゃなくて、お前本人だ」

由佳「そんなことより、さっきの答え教えてよ。救急車のサイレンの音の違い、あたしだけわからないなんて、ズルイじゃない。ねえ。ねえ、つてば」

直人「自分でわかるまで考えてろ。どうせお前、ベッドメイキングしかやることないんだろ？」

知子「ねえ、何でこの子が呼んだって言えるの？ 証拠は？ 証拠はあるの？」

直人「常習犯だからさ。なあ、由佳」

知子「それって本当なの？ そんなことやったら、この町もいつか、呼んでも救急車が来ない地獄の一丁目になってしまふんだよ、わかってるの、あんた」

由佳「あたし、あたし、違うから。近ごろはやってないんだから」

知子「だったら、何であんたの家の前で止まったりするの。何で花田医院の前で止まったりするの。あんた、花田医院の娘なんですよ」

由佳「あたしじゃない。あたしは知らないんです」

知子「しっ、何もやましいところがないんだったら、騒ぎ立てないで。ほら、救急隊員が恐い顔してこつちをジロジロ見てるじゃないか」

由佳「あんな人たち、何にも事情わかってないんだから」

知子「あんな人たちなんて言っちゃ駄目。ちよつと、そのマニアック野郎。こつちはただの野次馬だって説明してきなさいよ」

直人「俺が何で損な役回りになるんだよ。わかった、わかった。行ってくるって。ああ、すみませーん、すみませーん。いえいえ、無関係な野次馬なんですけど。どこのお宅なんですか？ あ、いえいえ、お手伝いしましょうか」

救急隊員の方へ近づいていく直人。好奇心の塊みたい。

知子「いいこと。救急隊員なんてそんなに大勢抱えてないんだから。前にあんたが間違っ
て呼んだときに、あんたか家族が謝った人があの中に混ざってる可能性大なんだ。

大声出したら、たちまちばれちまう」

由佳「！」

明美「！」

知子「何であんたまでビックリしてんのさ」

由佳「え？」

知子「そつちだよ、そつち」

明美「何で集まってるんですか。救急車マニアの方々なんですか」

由佳「そういえば、この人」

知子「なに？」

由佳「はじめてお話ししました」

ガクンと崩れる明美と知子。

明美「一体なんなのさ、この子は」

知子「ああ、あたしだってこんな真夜中に顔を合わせたのははじめて。昔部下だったけど、

いまは上司ね、こいつ」

由佳「あたしも前から見知ってます。建物の影に隠れて、あたしたちが集つてるところを
じっと見てました」

知子「野次馬に群がる野次馬？ 金魚の糞？」

一瞬怯んで引っ込むが、相手は何も知らないと言強気に出る明美。

明美「自分の家で病人が出たわけでもないのに、どうして長々と立ち話なんかしてるんだろうね。すぐ隣で火の手が上がってるんだったら、いつその火が移ってくるかと、いてもたってもいられないだろうけどさ」

由佳「可愛い顔立ちしてるのに」

知子「あだ花なのよ」

由佳「救急車の有難みがわからないなんて」

知子「自分に近づいてくるのがいい男じゃないと、鼻も引っ掛けられないような女」

由佳「残念ですね」

明美「何が残念なの」

由佳「可愛い顔立ちの女には、それに見合ういい男って残らないんです」

明美「ギョッ」

知子「あ、それ知ってる」

明美「知らないわ！」

由佳「不細工な女が、手当たり次第にいい男を搔っさらっていつちやうから」

知子「可愛い顔立ちの女に残るのは、不細工な男だけ」

明美「！ ガーン」

化粧を擦り落とす明美。

明美「二重まぶたは作り物。困ったような下がり眉もせっせと書いた偽物。細い顎のラインだって、高く見せた鼻筋だって、ツヤツヤしたリップだって、元々あたしにはなかったもの」

由佳「それらみんな落としても、まだ可愛い顔立ちの女」

知子「明美さん、ステキ」

明美「！ どうして褒めるの、意地悪」

知子「でもどうして、女子高校生の分際でそんな知識もってるの」

直人が戻ってくる。

直人「やっぱりこういうときは、身分のはっきりした職業が役立つもんだ」

知子「だから、あんたをお使いにやったのよ」

直人「職権乱用も甚だしい」

知子「それで何かわかったの？ ガキの使いじゃないんだからね」

直人「それが、花田医院では誰も救急車なんか呼んでないって。だからって、由佳、まだお前の疑惑がすっかり晴れたわけじゃないからな」

由佳「あたしは呼んでないって。そりゃ、昔、一、二度呼んだことはあるけど」

知子「一、二度呼べばもうベテランだ」

由佳を子供のように抱く知子。便乗して知子の背にもたれる直人。

知子「もうやめなさい。さもないと、この町も、呼んでも救急車が来ない地獄の一丁目になっちゃうんだから」

直人「我らの町に平和を」

知子「我が町に夜の眠りを」

明美「我が町にあたしは友達をつくるの」

さり気なく入ったつもりで明美だが、皆の注目を浴びる。それも一瞬。

直人「どうせなら、由佳お前乗ってけば。明日の朝には返してくれるって」

由佳「だって、あたし。こんなにピンピンしてるんだよ。どうやって演技しろって言うの」

知子「無茶な真似はやめなさい。救急車のサイレンが鳴って、ひとりであるのが心細くて集ってみたけど何もなかった。こんな夜ってどこかホッとしない？」

由佳「マニアックな夜の集い」

直人「俺はマニアック野郎じゃないって」

知子「わざわざ出てきた甲斐があるっても。まだまだ、世の中捨てたもんじゃないって思える夜」

由佳「地獄の一丁目じゃないもんね」

知子「あたしたち、こんなサイレンの夜にしかお目にかかれなんだから」

由佳「あら、元気にやってた？　なんて声掛け合うの？」

直人「近所の雪投げ作業みたいなものか」

知子「あ、あの家でも出てる。あ、こっちもやってる。あ、あっちも。なんだ、みんないーたんだー」

明美「いるわよ。あたしがいちやあ悪いのかって」

次々と肩からぶつかっていく明美。

由佳「痛いっ」

直人「痛てっ」

知子「痛いっ」

明美「それで相手が文句言ってきたら、線路に突き落とす」

由佳「恐っ」

知子「恐っ」

直人「恐っ」

明美「あたしがそんな恐いことするわけじゃない。ムシヤクシヤしてああゆうことやるのは決まってエリート」

由佳「警察官とか、税務官とか、館長とか」

知子「一般的に間違いを起こさないとされる人」

明美「だけど、あんたたちも躓いてどっか落っこちなさいよ。少しは気を利かせて、どっか落っこちなさいよ」

再度、次々と肩からぶつかっていく明美。

由佳「痛いっ」

直人「痛てっ」

知子「痛いっ、何なの、いったい」

直人「うわっとつと。ああ、俺の片足、側溝落ちちゃった」

明美「あ、ごめんなさい。片足が抜けないの？ あたしの肩につかまって。心配しないで、あたしの肩は抜けないから」

知子「可愛い顔立ちの明美さん」

由佳「きれいな顔立ちの明美さん」

明美「そんな風に呼ばないでってば。他の運がどんどん下がっていつちやうじやない。あたしだってもう、あんたみたいに、高校生のあんたみたいに保証されてないんだから。延長保証だってもう利かないんだから」

知子「あんたまだ可愛い顔立ちしてるから」

明美「それ、やめて！」

吃驚して明美から離れていく三人。

再度、次々と肩からぶつかっていく明美。

由佳「痛いっ」

直人「痛っ」

知子「痛いっ」

明美「救急車のサイレンが鳴ったときしかお目にかかれないの？」

知子「少なくとも、この人たちとはお目にかかれない。だからこうやってると愉しい気分になるの。ちよつと浮かれすぎ？ 駄目だわ、人が苦しんでるときに」

由佳「あたしは、あたしは誰が救急車に乗っていくのか見届けなきゃいけないんです」

直人「由佳、お前が呼んだから？」

知子「この子は呼んでないわ」

由佳「(強く首を縦に振る)」

明美「あたしも今夜から、あなたたちと一緒に眺めてもいい？」

コミュニケーションのように、肩をぶつけていく明美。

由佳「痛いっ」

明美「痛くないっ」

赤い照明が揺れて小さくなっていく。音も間違えたように短く鳴り、すぐ途絶える。

直人「収穫なしに戻っていくのは虚しいお仕事です」

知子「その考え方ももっとプラスにしなさい。マイナスに削っていくから、呼んでも救急車が来ない地獄の一丁目がはじまるの」

由佳「誰かが呼んだのなら、助けに来て欲しい」

知子「助けに来てくれないのが地獄の一丁目」

明美「心配しなくて大丈夫。あたしがまた呼んであげるから」

直人「呼んであげる？」

明美「なにそんなに意外そうな、驚いた顔してるの。マニアックなお兄さん」

由佳「野郎で充分です」

知子「側溝に片足落っこちた野郎」

直人「！」

明美「何でそんなに離れていつちやうの。話題も足も。今夜の救急車はあたしが呼んだの。

だってあなたたちと顔見知りの仲になりたかったんだもん。今度また一緒に見物し

たいわ」

由佳「あなたが呼んだ！」

知子「明美が呼んだ！」

直人「当たり前を手にはできない女、増えています」

●2場 由佳の部屋

一心不乱にベッド・メイキングしている由佳。部屋には直人の姿。

由佳「何であたしの部屋に上がり込んでるんですか？ 昨日も一昨日も、その前の日も、

夜になる度に上がり込んでる。あれからずっと、いつまでいるつもりなんですか。

ここ、あたしの部屋なんです」

聞こえているが様子を見つめる直人。

由佳「わかってるわよ。あなたの考えてることなんて。あたしが救急車を呼ばないかどうかどう

か見張ってるつもりなんだ。だけど、誰に断ってあたしの家に上がってるんですか」

直人「ナイトが現れるのは、ナイトでないと」

由佳「え？」

直人「ナイトが現れるのは、ナイトでないと」

由佳「え？ はじめのナイトは、二番目のナイトは何？」

直人「はじめのナイトは、女を守る騎士」

由佳「女を守る騎士で、ナイト」

直人「二番目のナイトは夜。三番目は、言いたくない」

由佳「！ ナイトが現れるのは、ナイトでないと。ナイトが現れるのは、夜でないと。語呂を合わせるために夜だけやって来るんですか。そんなわけですね」

直人「……」

由佳「あたしのお姉ちゃんと付き合ってるから、この家に入れるんですね。これまでは向こう側の部屋だけにして、顔を合わせることもなかったのに」

直人「由佳、お前がこの家から一步も外に出ないからだろ」

由佳「サイレンが鳴ると、部屋でじっとしてなんかいられない」

直人「こんな夜にしかお目にかかれないうち、そう言った女もいる」

由佳「救急車のサイレンが鳴ると飛び出して、どこの家の人なのか、助けを求めた人がちゃんと運ばれていったのか知りたくないから」

直人「救急車のサイレンのお陰で会えたってわけだ」

由佳「あれから何度か花田医院、つまりウチの名前で救急車が呼ばれてる。だけど、あたしじゃない。呼んだのはあたしじゃない」

きれいに整えられたベッドを目茶苦茶にする由佳。

由佳「可愛い顔立ちの女」

直人「可愛い顔立ちの女？」

由佳「可愛い顔立ちの女が、自分が救急車を呼んだんだって告白したじゃない。あの人、あたたしたちと一緒に騒動を眺めたいなんて言ったけど、あんなの大嘘」

直人「今度また救急車が来たら一緒に見物しましょう」

由佳「それが大嘘。あの人、うちの親を困らせたいの。だから、花田医院を名指しで電話するんだわ」

直人「困らせたい？ お前を誘拐するとうなる？ 三億円持ってこーい」

由佳「白ヘルメット貸してあげましょうか、通学用に使ったお古」

直人「毒入りキャラメルでも配ったろうか」

由佳「うちの親だって、人を陥れるんなら、もっとネチネチいくよ。いやらしくネチネチ、グチャグチャ」

直人「ガムでも噛んでるのか」

由佳「噛んでません」

直人「なんだかお前と喋っていると、お前の親父、花田医院の医者先生がものすごく悪い奴に聞こえてくるぞ」

由佳「悪い奴になったのよ」

直人「世の中、立派な振りして、悪い奴は大勢いるぞ。見かけニコニコ、態度ドロドロ。わかっているのに、ナンデスカ？ 連発の受け付け。なんだよあんた、そっちに行つて、対応の管理人。社会の窓は常に閉まってる」

由佳「あたしのせいなの？ あたし何も頼んでないのに。親は子供のためにドロドロ悪い沼に溶けていくの？」

直人「お前の親父がドロドロ悪い沼に溶けていったら、婿養子に入る予定の俺はどうなる」

由佳「同じ運命」

直人「！」

由佳「逃げるんだったら今のうちよ。さあ、お姉ちゃんと駆け落ちでもなんでもしてしまいなさい」

ここそそと逃げる準備をする直人。

由佳「この家に入ったら、あなたの信用もがた落ち。そうよ、逃げておしまい。怖くなったら逃げておしまい、野生の勘で。そしてあたしは、もっと優しい人間になりたい」
ベッド・メイキングに戻る由佳。

直人「由佳。お前は学校から逃げてるのか？ だから、ベッド・メイキングしかやることがないんじゃないのか？」

由佳「きつとそれが、うちの親を駄目にしたんだと思う。うちの親を悪い奴に変えてしまった原因はそれ。あたしが逃げたからいけなかったの」

直人「だけど、逃げるも戦い方のひとつだろ。それを知らない大人が愚かな争いで身を滅ぼしていくんだ。周囲の笑い声は、受け取りようによってはとても冷ややかに響いてしまう」

由佳「眠れない夜は、ジャマイカの音楽が邪魔してるの」

直人「じゃー、まあ、いっかー」

由佳「実際は誰かの笑い声が忍び込んでくる。調子っぱずれに明るいきもあれば、陰険な、しつこく覆い被さってくる笑いもある」

夢の中で、知子と明美が登場。

明美「あら、あんたの父親が医者のかせに人の悪口散々叩いてるから、懲らしめてあげたのよ、あたし」

知子「そんな下手なベッド・メイキングしてるから寝付きが悪いのよ。枕カバーが皺だらけ。シーツの裾もはみ出てる」

知子の指導でベッド・メイキングし直し。

明美「そんなことしたって無駄無駄。あたしは夜ごと、あんたの家に救急車のサイレンをどけてやることだってできるんだから。楽しみだね、ほんと。会えるのが」

居座ろうとする明美を知子が無理に引き連れて去る。

由佳「何度やっても上手くならない。やっぱり本職には敵わないな」

直人「皺もできてるけど、目の下にクマもできてる」

由佳「え？ 夜は人並み以上眠ってるのに」

直人「由佳、お前じゃない。あの、可愛い顔立ちの女だ」

由佳「夜中に必死こいて電話かけまくってる。クマに追いかけられたように、懸命にかけまくってる」

直人「由佳。お前、学校行かないと変な噂たてられるだろ」

由佳「しらない。少なくとも、あたしの耳には届かない」

直人「あれ？ お前、しよげてないんだな？ 目の下にクマもないしな」

由佳「あたし何も悪いことしてないんだもん。だけど、うちの親がおかしくなっちゃってる。狂ったように悪事に手を染めてる、ああ、ここがあたしの地獄の一丁目」

直人「言うな、言ってくれな。俺に情けを」

由佳「花田医院の評判だって、あの可愛い顔立ちの女がガタガタに壊してくれる」

直人「俺の人生も崩壊か。ていうか、お前の親父は一体何をやらかしたんだ？ おい、ベツド・メイキングなんかやってる場合じゃないだろ」

由佳「あたしの言葉なんか信じる？」

直人「俺を誰だと思ってるんだ」

由佳「マニャック野郎、だけどいいもん」

直人「ひとりで完結するな」

由佳「あたしのこと、悪い噂流してる子なんて本当にいるんだろうか。さらにその子たちの親まで混ざって、あることないこと言い募ったりするんだろうか。やっぱ変わってる子は損しなきゃいけないんだろうか。あたし、何ひとつ悪いことしてないのに」

直人「……」

由佳「友達になるのは難しい。ちょっと早すぎる大人の結論に、高校生の分際で達しちゃうただけ。あたし、何ひとつ悪いことしてないんだよ」

直人「もうひとつ大人になって、周りをやり過ぎす術を覚えろ。そしたら」

由佳「そしたら、あたし、大人になるまで生き残れるかな」

直人「心許ないか？」

由佳「心は持つてるけど」

直人「悪口が言えるか」

由佳「言えるよ、このマニャック野郎」

直人「はい、お水」

由佳「え？」

差し出されたコップの水を無言で飲み干す由佳。

由佳「でも、何でお水？」

直人「辛いとわかってて、カレーを食べてくれたお礼だ」

由佳「大人って想像以上にややこしい。やられたこと、そっくり仕返ししちゃうから」

直人「え？ そっくりやり返したの？ こう来たら」

ボクサーのように右フックを入れる直人。

クロスカウンターの形で、由佳もパンチを放つ。

由佳「こうやる」

直人「うっ。激しいっすね、俺汗掻いちゃった（タオルでふきながら後退）」

由佳「うちの親は激しいっていうより、むしろ狂ってる。狂気の舞を踊ったたま、未だ倒れようもしない」

直人「大人は不便でいけないな。ものわかりもよくない。もっと具体的に言ってくれ、具体的に」

由佳「マニアック野郎にもわかるように？」

直人「！ そうだ、側溝に片足突っ込むくらいガンガンと」

廊下から勝手にビールを持ってきてごくごく飲む直人。

由佳「お酒の力でも借りたんじゃないかと、あたしは疑ってる。あたしの悪口を広めたひとりの父親のあることないことばらまくのに、うちの親がどういう汚い手を使ったか知ってる？」

直人「ヤギさん郵便でも使ったか。証拠隠滅するのにもってこいだ」

由佳「別に食べてしまう必要はないの。病院っていういろんな人が集まるところだから誰も疑わないわ。噂の出所？ そんなものいくらでも誤魔化せちゃう。自分が被害者でなければ、ああ、あの人そうなんだーって平気で受け容れちゃう。スパイスを利かせて派手に演出しちゃうってもまずばれない。ばれないと、次はもっともっと派手にやっちゃう。何をばらまくかって？ 写真をばらまくなんて、そんな足がつくことやらなくたっていいの。弱みなんて見つけようと思ったら簡単じゃない。それで足りなかったら奥さんや子供の弱みを握ったっていい。叩いて埃の立たない人間なんてこの世にひとりもないんだから」

直人「医者っていう立場は絶大だね。ハンサムボーイじゃなくてもいいんだ。チビでも、デブでも関係ない。植え付けられた良い人のイメージは絶大だ。まさかまさか」

由佳「まさかまさか、の大悪党。医者を利用して、病気のひとつやふたつでつち上げたってそれまで」

直人「なんでもござれ、でござるか」

由佳「やる気になれば」

直人「健康体そのものの人間をも、病気のオンパレードに作り替えちゃう」

由佳「うちの親は医者でありながら、そういう悪に手を染めた。何のためって、他でもない娘の、あたしのため。だけど、あたしはあの子の親がそんな悪い噂を広めるはずがないとわかってる。いくらそう訴えても、やめようとしなさい」

直人「その中の小さなひとつ。花田医院の隣の鯉のぼりが、由佳の同級生の父親に盗まれたって噂は本当ですか？」

由佳「隣は男の兄弟がいません」

直人「！ その家で鯉は泳ぎません」

由佳「干してあったのは黒と赤と青、三匹のステテコです。ねえ、どうして大人は一旦始めた戦いから手を引けないの？」

直人「私こそは正しい人間という激しい思い込みがあるから」

由佳「あなたより、よっぽどマニアック。がっちがちのマニアック野郎」

直人「私こそは正義、そんな良いイメージ野郎の裏側ってどんな味？」

由佳「何ヶ月も洗ってない背中のおい」

直人「コ汚い。コ汚い背中だ。コ汚いので洗って差し上げましょう」

由佳「愛情で背中中の皮をひん剥いてちょうだい」

直人「痛くて痛くて泣くかもしれない」

由佳「中途半端に優しさをみせちゃ駄目。後悔の涙を流すまで、背中中の黒い皮をひん剥いてちょうだい」

直人「コ汚く分厚い皮を、勇気を持ってひん剥きます」

由佳「勇気は別のことに使いたい」

直人「勇気はどんな味？」

由佳「勇気は涙の味と一緒に」

直人「では、しよっぱいんですか？」

由佳「あなた、あたしより頭が良いのに勇気がどんな味がするのかもわからないんですか」

直人「そういうえば、由佳。お前は救急車のサイレンを呼ぶイカレポンチだったな」

由佳「イカレポンチは、救急車を呼んでしまうあの可愛い顔立ちの女」

直人「あの可愛い顔立ちの女？」

由佳「いたじゃない、きれいな顔立ちの女」

直人「肩をぶっつけられた気がする」

由佳「線路に落とされたじゃない」

直人「線路じゃなく側溝だ。だから生きている」

由佳「彼女が、うちの、花田医院の名前で救急車を呼んでるのは、うちの親にも責任があるの。回り回って。最初は、いい気になったうちの親からあることないことばらまかれた人に同情？ 同調？ したんだね、あの人。日本人ってミーハーだから」

直人「ミーハー？」

由佳「ある人がやってること、自分もやってみたくなるの。ところで、源頼朝と源義経、どっちが好き？」

直人「そりゃあ、義経にきまつてるだろ」

由佳「これで、あなたを日本人と認めます（拍手）」

直人「弱い者の見方。判官びいきだから？」

由佳「あの可愛い顔立ちの女が弱い人に味方するのも無理ないわ。回り回って、あたしのうち、花田医院の名前で救急車を呼ぶ理由がこれでわかったでしょ？」

直人「犯人は犯行現場に戻ってくる」

由佳「可愛い顔してあの娘（こ）よくやるもんだ、なんて言わないで」

直人「可愛い顔してあの娘（こ）、背中中はコ汚いんだね」

由佳「でもサイレンを呼ぶのはやめて。そんなこと繰り返してたら本当に大事なときに救急車が来ない町、地獄の一丁目になってしまう」

直人「イカレポンチはマニアックじゃないの？」

由佳「サイレンの鳴った夜にしかお目にかかれないマニアック野郎」

直人「！ あの中であんなひとりだけ、野郎です」

由佳「サイレンの鳴った夜にしかお目にかかれないって、なんかステキじゃない？」

直人「イカレポンチの由佳が、何故それほどまでに人様の心配をするんだ。夜中に誰が運

ばれようが、放置されようがイカレポンチは何の手助けにもなれない」

由佳「見守ってあげたいの」

直人「見守り隊なら黄緑のジャンパーを着て、黄色い旗を振ってください。見るだけより、肌身離さず持つ御守りのほうが御利益ありますよ、きつと」

由佳「イカレポンチの怒りは、どうやら内から外へ向かってる」

直人「怒りですか？ 福は内、鬼は外。あ、やっぱり怒りは外へ向かってる」

由佳「あかし、もう救急車を呼ばないわ。自分を傷つけたりしないもの。そのかわり、夢の中で何人かの人を殺してきた」

直人「！ 何人かの人を殺してきた？」

由佳「夢の中で殺してきたの」

直人「俺、外に出てたほうが身のためですか？」

由佳「大丈夫よ、この世に鬼はいないから」

直人「怒りもないんですか？」

由佳「あたしの怒りは、奪われてる気がする」

直人「怒りを奪われてる？ 誰に？ 鬼に」

由佳「呼んでも救急車が来ない地獄の一丁目をつくった鬼に」

直人「ほんとにそんな町があるのか？ どこだ、出てこい、鬼」

由佳「人間は怒りを奪われると、腑抜けになっちゃうの。わかる？ ふぬけ」

直人「鳩ぽっぽほろほろ はひへほ。あ、ホントだ、ふが抜けると、如何にも腑抜けだ」

由佳「あたしはまだ罪の意識があるんだもの。自分のやったことを確認できる。だから、怒りがどこへ向かうべきなのかちやんと知ってる」

直人「マニャク野郎は腑抜けじゃないな。オッス！」

由佳「夢の中であたしは人を殺した罪で捕まり連行されるの。後ろに回った腕にはちやんとタオルか何か掛けて隠してくれる」

直人「リアルですが、ひとつだけ指摘します。実際は手が後ろに回ることはないです」

由佳「前です」

直人「ところで何で、逮捕されたのにこうして毎日家でベッド・メイキングしていられるんだろう」

由佳「捕まるのだけはとつても恐かった。どうにかして逃げようと考えた。でも、実際には誰をも殺してないから、あたしはその夢から覚める。だけど、恐いという感情は濃く残るんです」

直人「待てー、と追いかけられる怖さが？」

由佳「人を傷つけてしまう怖さです。ハッと我に返って欲しい。ハッと我に返った人が慌てて救急車を呼ぶことだってあるんです」

直人「そんなレアなケースは、まずない。レアチーズのほうが美味しい」

由佳「それでもあたしは、救急車のサイレンが鳴ると飛び出して確認したくなる。慌てて助けを呼んだ人が間違えなかったか。ちゃんと目的地にたどり着けたんだろうか。ちゃんと乗せられたんだろうか。ちゃんと運ばれていったのだろうか。助けを求めた人が無事確保されるのかどうか気になって、あたしはいてもたってもいられなくなる」

直人「思いが強いんだ。助けたい、という思いが」
由佳「助かるのは命と心なんです」

暗転

●3場 知子の勤務先 病院か介護施設。ガランとした部屋。
ベッド・メイキングしている知子。年季が入っている。
そこへ明美が入室。

知子「明美さん。どうされたんですか」

明美「主任と呼んでちょうだい、主任と」

知子「は、はい。相原主任」

明美「ねえ、待って。主任よりチーフのほうがかっこよくなって？」

知子「はい、相原チーフ」

明美「まだ決まってもいないこと、勝手に言わないでくれる？ あたしが恥をかくだけでしょ、まったく」

知子「どうしたの、明美さん。あちこち顔出して、みんなに主任と呼ばせてるって話は既に有名です」

明美「呼ばれてみたくなるのよ。あなただってわかるでしょ、ついこないだまであたしの上に立ってたんだから。ねえ、元主任」

知子「ここはあたしに任せてくださって結構ですから」

明美「ねえ、おかしくない？ 不当です、こんな不当人事は無効です。元の地位に戻してくださいってギヤアギヤアわめいてた人が急におとなしくなって。こんなベッド・メイキングを毎日毎日やらされて」

知子「腐ってもいいんですか？」

明美「腐ったって、助けてくれる人いないよ」

知子「だったら新鮮チルドの保存状態で」

明美「若い肌を保てるんだったら、多少冷たい環境だって我慢できる」

知子「新人だったところに覚えた仕事です。おろそかにするなと鍛えられました」

明美「鍛えられた割に、二の腕あたしより細いじゃない。筋肉はどこにかくしたの？」

知子「主任になったら上から下から挟まれて、サンドイッチされてぺっちゃんこになりました」

明美「ふうん、じゃあ今度はあたしの二の腕が細くなる番だね」

知子「中間管理職になると、友達や仲間も細くなりますよ」

明美「え？」

知子「みんな、主任とかチーフとはこれまで通り付き合ってくれなくなるんです。寂しいもんですよ、いままで友達だ、仲間だとわいわい騒いでいた関係が、ふっと手のひら返したように消え去っちゃうのは」

明美「！……」

知子「顔色が悪いです。大丈夫ですか、相原主任」

明美「主任と呼ばないでっば」

知子「はい、チーフ」

明美「チーフとも呼ぶな、バカ野郎。友達も仲間もみんな、あたしの周りから消えちまうだろ。あたしの前から消え去っちゃうだろ」

知子「明美」

明美「上司なのに呼び捨てか」

知子「あたしが主任降格したから、明美が昇格できたんでしょ」

明美「妙にサバサバしたものの言い方するんだね。ギヤアギヤアわめいた人が」

知子「もしあのまま赤ちゃんが生まれてたら、まだギヤアギヤア泣いてただろうね。ベビ―ベッドの上で」

明美「まったくどうかしてるよ。お腹に赤ちゃんができて、どんどん膨らんでいくのは当たり前前だのクラッカーだろ。それを風船みたいに、バリんと割りやがって」

知子「ああ、君。妊娠したの。産休取るんだよね、産前産後と続けて。通常業務に差し支えるな、ああ、ダメよ、ダメよ。じゃあ仕方ないけど、君、降格ね、降格。主任？

何言ってるの、通常業務に差し支えることやっというて。降格といったら降格だから」

明美「見事に騙されたもんだね」

知子「え？ あたし騙されたの？」

明美「騙されたっていうか、それが企業の基本姿勢」

知子「姿勢が曲がってます、正しなさい」

明美「曲がってるのは、根性であります」

知子「曲がった根性は、治りません」

明美「あら、諦めが早いんですね。あっさり」

知子「根性の曲がった人とは戦わないことにしてるんです」

明美「じゃあ、お腹に赤ちゃんができたがために主任から降格は、甘んじて受け容れるんですか。そんなことでは、上にいる人間をますますつけあがらせるだけ。それで、いいんですか？」

知子「主任なんて地位はクソだとわかりました」

明美「え？」

知子「明美、あなたを見ていて、主任の地位がどれだけクソかはつきりわかったんです。

やがて痩せ細っていくその二の腕」

明美「え？ やっぱり羨ましいんじゃないの？ あたしのこと羨ましいんじゃないの？」

知子「あたし、主任を奪われてから健康的になりました」

明美「それは単に、二の腕がたふたふになっただけでしょ。苛々することがなくなっ、太っただけ」

知子「明美さん可愛い顔してるから、太ったら台無しです。どうかずっと主任でいてください（一礼）」

さっさと片付けて、別の部屋に行く知子。

暗転。

同じような部屋。ベッドだけ乱れてる。せっせと直していく知子。

知子「(鼻歌)」

明美「(血相変えて) ちょっと待ちなさいよ。可愛い顔立ちの女が近い将来結婚して、お腹に赤ちゃんできたらあたしも主任から降格されちゃうの？」

知子「明美も降格？ そうなるんですかね？ やっぱり」

明美「そうなるんですかね、やっぱり、じゃないわよ」

知子「明美も、主任の地位なんてクソだとわかるの。そしてこの国の社会にどれだけ根性の曲がった人間が多いかわかるの」

明美「上からも下からも挟まれて、神経すり減らして、ぺちゃんこになるからこそ、可愛い顔立ちの女を保っていられるのに」

知子「明美、お腹に赤ちゃんでできる予定あるの？」

明美「！ ない。それどころか、まだ相手もいなかった」

知子「おめでとう、主任の地位を確保できて。教訓。女が社会で地位を確保したかったら、業務に差し支えるような真似は控えること。根性のねじ曲がったこんな暗い社会でも、明美なら、やれる」

明美「ちよつと待ちなさいよ。あたしが仕事しかない、クソみたいな扱いしないでくれる」
救急車のサイレンが短く鳴る。ビルの反射で高く聞こえたり、消えかけたり。

知子「あ、サイレンが鳴ってる。どこだろ？」

明美「なに、ぼうつと突っ立ってるの。行くわよ、早くしなさい」

知子「え？」

明美が知子の手を引いていく。

明美「こんなときにしかお目にかかれない人だっているんだから」

知子「野次馬も出会いの場ですか？」

明美「救急車が来たら一目散に駆けつけるの。ちよつとあんた、どこ行くのよ」

知子「運ばれてくる人が落ち着けるように、ベッド・メイキング頑張ります」

明美「馬鹿言ってるんじゃないの」

野次馬のなかに由佳と直人。

知子「救急車のサイレンの夜にしかお目にかかれない子がいる。マニアック野郎もいる」

明美「救急車呼ぶ癖のあるイカレポンチに、救急車のサイレンの違いを聞き分けるマニアック野郎」

知子「明美ったら、不満そうね」

明美「そんなことない。あの人たちがまた誰かにあたしを繋げてくれるんだから」

知子「いろんなところにチョコチョコ顔出すの趣味なんですか」

明美「ほんの、チョコツとよ、チョコツと。あたしの名前がチョコツと載るだけの活動を、

あちこち掛け持ちでやるわけ。あつちもこつちも応援してます、って言って回るの」
知子「義理チョコ配る感覚ですね」
明美「え？」

知子「確かにチョコもらったんだけど、これ、誰からもらったんだっけ、程度の扱い」

明美「え？ あたしって、その程度の扱いだったの？」

知子「そんな立派な精神持っていないくせに、みんなを応援してます、なんてチャツカリ言うんだらうね。大きな声で手拍子合わせて。コメントもしっかり太字で」

明美「え？ あたし、そんなにチャツカリしてたの？」

知子「ああ、いま担架に乗せられて運ばれていくところ。どうか助かりますように」

明美「こんなときにしかお目にかかれない人たちとシヤバでお友達になる以外、どんな楽しみがあるっていうの？」

知子「楽しみ？ 呼んでも救急車が来ない町を減らしていくことに決まってるじゃない。この世から地獄の一丁目をとことん消していくの」

サイレンが一際高く鳴ったかと思うと、走り去る。

明美「そう言えば。主任を降格までさせられたお腹の赤ちゃんはどうなったの。働いてるってことは、誰か赤ちゃんを見てくれてるのね、そうよね」

知子「生まれなかったんです」

明美「え？ あたしの耳、死んでる？」

知子「あれ？ どうしたんだろ。恐いなって思ったとき、呼んでも救急車が来てくれなかった。恐くて不安で、ずっと待ってたのに。はい、こつちまで自分でこれますね。

え？ そんな。それきり、電話は途切れたまま死んでしまった」

明美「もしかして、地獄の一丁目に住んでたの？」

知子「はい、相原主任。呼んでも救急車が来てくれない地獄の一丁目には、もうとても恐くて住んでいられず引越しました」

明美「お腹の赤ちゃんは」

知子「……（首を横に振る）」

明美「お腹の赤ちゃんはどうしたって聞いてるんだろ」

知子「……（首を横に振る）」

明美「答えなさいよ」

知子「……」

明美「赤ちゃんは生きられなかった。そうなの？」

知子「小さな命は、生きることができませんでした」

明美「だったら、産前産後の休暇もとらない。業務に支障がないのに、主任の地位は取り上げられちゃったってどういうこと。無駄に負けて、何にもならないじゃない」

知子「根性がねじ曲がってるんです」

明美「社会が暗く見えませんか？」

知子「人は幸せなものを妬むんです。ちよつと小顔で、ちよつとスマートでも女は妬むんです。何の落ち度もない人を突き落とそうとするんです」

明美「あたしも幸せたつぷりな娘(こ)を妬んでる。たくさん側溝に突き落としてきたわ」

知子「根性のねじ曲がった大きな存在と戦っちゃいけないんです」

明美「まるつきり損した、その怒りはどこへ行ったの？」

知子「主任。あたしは、ベッド・メイキングと戦います」

休めていた手を忙しく動かさず知子。

知子「怒りは深く沈めて忘れませう。枕カバーがはみ出さないよう、枕に腕を入れて折ります。

マットレスの下に意識して三角形をつくるように折り込みませう」

明美「ちよつと待ちなさいよ。あたしに主任を奪われて悔しくないの？ 悔しいっていいなさい」

知子「錨は暗い海の底です、相原主任」

明美「あたしに主任を奪われて悔しくないの？」

知子「おめでとう、の言葉が欲しいの？ 明美もおめでたになったら、お腹に赤ちゃんで

きたら主任から降格されるんだ」

明美「え？ お目出度いのに、ちつともお目出度くない。なんなの？ この気持ち」

暗転。

夜の住宅地、ふたたび。サイレンと赤いライトが近づいてくる。

掛けだしてくる知子。辺りを見回しながらふらつく由佳。物陰に潜む明美。

知子「どこだろ？ また花田医院のほうへ向かってない？」

由佳「こんどこそ、うちじゃない。こんどこそ、うちじゃない(否定) うちじゃないんです。ああ、どうして。どうしてこんなことになってるの」

知子「あら、こんなサイレンの鳴った夜にしかお目にかかれない娘(こ)」

由佳「(ぎこちない会釈)」

知子「この近く回ってる。音が変化してる。また来てる」

由佳「ホントにあたしじゃないんです。他に誰か悪戯して面白がってる人がいるんです」

明美「このイカレポンチ。あなたの親にあることないこと言い触らされた男が、腹いせに呼んでると思ってるんだろうけど、その考え自体がイカレポンチなんだよ」

由佳「え？ あなた、こないだ会いました。こんな夜に」

知子「こんな夜にしかお目にかかれない人を追っかけて、シャバで友達いっぱいつくるんだって。涙ぐましい努力の娘(こ)だね、明美は」

明美「花田医院のイカレポンチのパパに仕返しされて、あることないこと散々叩かれた男が、今度はあんたのうちに救急車を呼んだって？ やるわけないだろ、んなこと。

その若い血管バンバン走ってる脳みそ、もっと働かせろ。だいたい周りがどつちの味方につくかわかりきってるだろ」

知子「多勢に無勢。あたしだったら戦わないわ」

明美「一度落ちたことのある人間はよくわかってるね」

知子「明美もいつか落ちるんだね」

明美「え？ あたしも落ちるの？ ねえ、あたしはそのために友達増やそうと躍起になつてるの？ どうしてそうなるの？」

知子「出会いが増えて、選び放題に相手を選んで。お目出度くお腹に赤ちゃんができて。業務に察しつかえるからと、人事降格の憂き目に遭って。やぶ蛇だね」

明美「と、とにかく」

知子「だけどあたしは義経に、明美に味方するからね。ここは優しい日本だから、弱い者の見方。判官びいき」

明美「と、とにかく、黙ってて。この場はあたしが仕切ってるんだから、だまらっしゃい。いいこと」

知子「オッス！」

由佳「オッス！」

明美「オッスじゃないだろ。花田医院のイカレポンチが。花田医院の名で救急車を呼んだのは、このあたしだよ。イカレポンチのパパにあることないこと散々叩かれた男はじつと堪えてるだけ。実際に仕返なんてやれるわけがない。その悔しさ、怒りをくみ取って、あたしが代わりにやってあげたの」

由佳「代わりにやってあげた？」

明美「そうよ」

由佳「ちよっと待って。代わりにやってあげたってどういうことですか」

明美「代弁してあげたの。やられっぱなしで、あまりにもかわいそうじゃない？ 名誉挽回ってやつ？ もちろん、あの男の女房とは友達でもなんでもない。トラブルに便乗はつきもの。相乗りよ」

由佳「いい気になって、そんな勝手なことしないで」

明美「あの人も望んでると思ったの」

由佳「望んでなんかないわよ、ちつとも。悔しくたってすぐ仕返しなんかするもんですか。誰もが唇を噛みしめて、弱さを噛みしめて、じつと耐えてるんだから」

知子「この町まで、呼んでも救急車が来ない地獄の一丁目になったらどうする気？」

明美「あたし、そんなのどうでもいいから。とにかく人のことなんかどうでもいいから。会議だってそうでしょ、人のことに及ばないんだから。やり遂げたの。だから、あたしもつともつと多くの友達を望んでもいいよね」

由佳「シャバで友達つくるのって、そんなに大事なこと？」

明美「イカレポンチと呼ばれないために。マニアク野郎と後ろ指さされないために普通の友達が必要な。普通であるために。人から認められるために」

由佳「でも、普通って、何かと比べるから普通を意識できるんでしょ？」

知子「普通であることはなんて難しいんだろう。あれこれ選んで、いちやもんつけて、関係をややこしいものにして。シャバならではの特権が絡んでくるから、そう簡単にはいかない」

由佳「シャバは手続きが面倒なんだから」

明美「それでもあたしは、シャバで友達が欲しい」

知子「こんな夜にしかお目にかかれない、そんな野次馬を用意してでも」

由佳「え？ こんな夜にしかお目にかかれない、この場が周到につくられた出会いの場だ

ったの？ 利用されてたの？ どうでもよかったの？」

明美「あたしは、そこにいたい。あたしは、みんなと一緒にいたい。あたしだってその権利があるはずよ」

由佳「可愛い顔して、あの人」

知子「可愛い顔して、明美」

明美「可愛い顔して、よくやるもんだと言われても、あたしは、そこにいたい。そうやって仲間に囲まれていたい。あたしの人生は人に囲まれていたい。あたしは豊かでありたい」

救急車のサイレン音と赤いライトが、ゆっくり近づいては遠ざかる。
いきなりその方向へ走り出す明美。

明美「あたしです。患者はあたしなんです！ 隊員の皆さんとも友達になりたいんです」

知子「明美ー！」

明美「どうか連れてってください。どうでもいいなんて言わないで、あたしを連れっけて。お願いだから」

間があり、ハッチの閉まる音。救急車のサイレン音と赤いライト。

由佳「ハッチが閉まった。閉まっちゃった」

知子「え？」

由佳「え？」

知子「なんなの、あの子？ 明美が消えちゃった」

由佳「運ばれていっちゃった。何の罪のない人が運ばれていっちゃった。どうしよう。あ、この場で、あたしにできることはなんだろう」

知子「祈りましょう。ああ、心根の優しいニッポン人。どうか寂しい女をお救いください。どうか寂しい女をお救いください。大丈夫ですよー。彼女、そこに留まることができるなら、一切あなた方の悪いこと口にしませんから」

由佳「あたしにも聞こえる。心が変わりだした。サイレンの音が変わりだした」

耳を澄ませる由佳、知子。いつしか直人も。

住宅地を抜けるとサイレンが甲高い音に変化。

幕